

# エソタ



自主映画制作に明け暮れた学生時代、企業で営業職の頃、その人の著作、評論にはとにかく目を通した。人生は一度きりだと至極当たり前のことを悟り、平成の始まる頃、一念発起して転職した。五十の劇場公開映画をプロデュースしてきたが、その影響は今も昔も計り知れず。その人とは、蓮実重彦氏である。信頼する映画評論家にして元東京大学長、その薫陶を得た門下生たちの多くは今も映画制作の最前線で活躍し、私も彼らと多数の映画をつくってきた。

柄にもない大学教授の職に就き、いよいよ映画、大学どちらを向いても頭が上がりな

## ■ 蓮実重彦氏の扇動、 ■

い、全くもって恐ろしい存在だ。

仙頭 武則

蓮実先生が拙作の完成試写に来てくださるようになり、そんな内心など見透かされてはならぬと虚勢を張り、余裕のそぶりで談笑などしてみせた。ある時、会話が本当に弾み、何かの拍子に周囲を見回すと、監督、スタッフ、キャストまでが起立、整列、反省深き生徒のごとく私たちを見ている。「天覧試写ですね、まったく」とスタッフつづぶやき、一同苦笑。

そんな蓮実先生が初の新書『見るレッスン 映画史特別講義』を昨年末に刊行された。年始、読んでみると意味深長な連絡が知人からあった。覚悟してその書を手にとった。冒頭わずか数ページで「仙

## その風に乗る 舞いたい



第29回三島由紀夫賞の贈呈式であいさつする蓮実重彦氏。2016年6月24日、東京都内で

頭武則さん、かつての(略)すじさはもうない」とあった。動揺あらわに、一気に読み進むと「プロデューサーの不在」という見出しの項には「プロデューサー的才能はあるが、今は教鞭をとって、弟子が育っていない」と書かれていた。全国紙の映画担当記者氏からはソーシャルメディアで「蓮実先生の扇動装置、健在(笑)」ときた。

四月二十九日) 四十年の時を経て、氏の著

書に名が載ったのは誰かなのだよ、しかもプロデューサーに言及されたことなどほとんどなからう、祝福せねばならぬ出来事ではないか、喜びたまえよ、君。 巨人の扇動で